

みなさんの身の回りをほとんど年中飛び回っているのに、ほとんど気にもとめないで見過ごしているヤマトシジミの紹介。名前は日本（大和）を代表するチョウのようだが、北海道にはいなく、北は青森、秋田、岩手の一部に見られるだけで、それより南では各地に広く分布。幼虫はカタバミの葉っぱを食べて育つ。小さいチョウの代表であるシジミチョウ科に分類され、その大きさが翅全体で2.5cm 足らずときわめて小さい。飛び方はかなり早いランダム飛翔でみなら翅表のブルーが光ったりするが、翅裏の灰白色だけが目立ち、何かチラチラと飛んでいるな、と気づいている人はけっこういるはず。このチョウは関東から南ではあまりに普通にみられるためチョウ採集を趣味にしている人でも、よほどでないで見向きもしない。ところが、このチョウの翅の表面をよくよく観察するとすばらしく美しいブルーに輝く鱗粉がちりばめられているのに驚かされる。松波町北側公園では朝早くから朝日を受けて日光浴をしている姿をみるが、このとき、太陽光線にあたる角度によって、まるで宝石のようなブルーの輝きをみせてくれる。左の写真は、ちょうどそういうタイミングで撮影したもの。多くのチョウは、外気温が高くなるまで翅を動かすための筋力が作動しなく、日光浴によって体温の上昇を待つ光景がよくみられる。このときにとる姿勢はさまざまで、体に対して翅をV字型に開くタイミングが、チョウ撮影を趣味とする人にとって最も好まれる。翅全体を平に広げて太陽光を受ける光景もよく見られるが、V字態勢だと翅の表裏双方の特徴を一度にとらえられるというのが好まれる要因。



80630 松波町

受ける光景もよく見られるが、V字態勢だと翅の表裏双方の特徴を一度にとらえられるというのが好まれる要因。

興味ある観察例として、羽化してまもないと思われる新鮮♂に他の♂が翅を小刻みに震わせながらミス求愛で迫っていく光景にでくわし、しっかりビデオ記録を撮った。迫られた♂はときおり翅を開いて「ボクは♂なんだけど」と応えていたが、♂はしばらく求愛ポーズをとり続けていた。実際の♀は涼しい秋まではもっぱら翅表が黒一色であり、♂は♀の広範な黒色をマーカーとして認識するのだと思われるのに、この♂は何で♀だと思ったのか。ヤマトシジミの



80701 西畑：♂のミス求愛



June 27, 2008 加古川市志方町♀



Nov. 11, 2008 西畑♀



Nov. 13, 2008 西畑

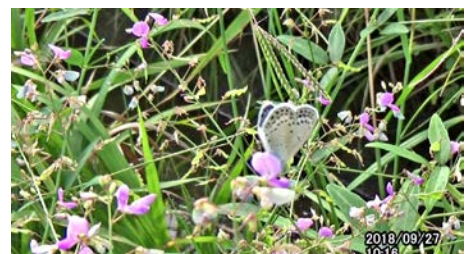
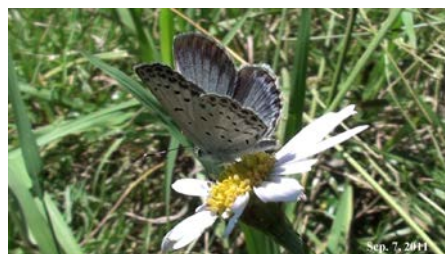
♀は秋が深まると翅表にしびいブルーの鱗粉をちりばめた美しい姿で登場する。これら美しい♀がみられるようになる日没の早い晩秋に、ヤマトシジミが多い草むらを散策していると、あちこちで眠りに入る準備を整えた姿を目にすることができるが、その多くが雨露をしのげる草陰ではなく植物先端の花穂部に頭を下にした姿勢で静止している。雨の日だったらどのような過ごし方をするのか、今後注意して観察する必要がある。



本種はいろんな花の蜜を求めるが、それらの記録を集めてみようと思いだったのは 2018 年の 9 月になってからで、左からカタバミ、アレチハナガサ、キツネノマゴだが、過去の記録を再



検索しても植物の名前がわからないものがある。June 27, 2008: 不明、Nov.14, 2008:アリッサム、



Nov. 4, 2011:カタバミ、Nov. 20, 2009:スノーボール、Sep. 7, 2011:ノコンギク、Sep. 27, 2018: ヌスビトハギとセイヨウタンポポ。なお、同日、本種では初めてとなるメヒシバ穂先で愛をはぐくむ

交尾ペアの記録もとれた。その後の新たな訪花観察例は Oct. 5:ヒナギキョウ、ミヤコグサ、Oct. 12:カンサイタンポポで、今後も随時追加していく。

